

私とクラシック

産業技術総合研究所 最高顧問
元 ソニー株式会社 (当時) 取締役代表執行役社長
中鉢 良治



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第14回は、東京フィルオフィシャル・サプライヤーであるソニーグループ株式会社 (当時:ソニー株式会社) の取締役代表執行役社長を務められ、東京フィルの会長としても様々にお力添えくださった中鉢良治様。現在もパートナー会員として東京フィルをご支援いただき、また多くのコンサートに足をお運びいただいています。ソニーの技術者として活躍し、オーディオテープの開発に注力された若き日の思い出を綴ってくださいました。

学生の頃、私は仙台に住んでいた。当時、仙台にはプロのオーケストラがなく、クラシック音楽は専らLPレコードで聴いた。他のジャンルの音楽も聞いていたが、大概、お酒を飲みながら本を読みながらの「ながら聞き」だった。しかし、どういうわけかクラシックだけは、お酒も飲まず物音一つも出さず、静かに「聴いた」。

就職して最初に配属されたのは、仙台にある磁気テープを開発・製造する事業所だった。仕事の一つにオーディオテープの開発があり、製品が完成に近づくと、実際に音入れをして、職場の皆で試聴した。音源はいつもピアノとヴァイオリンとヴォーカルの3種だった。試聴も業務の一部だったが、クラシック好きには格好の鑑賞の場となった。

その後、私はアメリカ南部の田舎町にあるテープの製造事業所に赴任した。そこではクラシック音楽を生で聴く機会はほとんどなかったのだが、年に一度、市がクラシックコンサートを開催し、市民に鑑賞の機会を提供してくれた。曲目は毎年ドヴォルザークの『新

世界』だったように記憶しているが、楽章ごとに盛大な拍手が鳴り響くのには驚かされた。形式にとられないアメリカ南部の人たちの陽気な楽しみ方だった。

東京に戻って、コンサートに行く機会も増えた。そんな私にクラシック音楽の楽しみ方を教えてくださったのは、大賀典雄さん (元ソニー会長、東京フィル永久楽友・名誉指揮者) だった。コンサートで一緒にいる機会があれば、休憩時間に入るなり大賀さんのところに駆け寄り、演奏曲目のこと、作曲家のこと、オーケストラのことなど、いろいろとお聞きした。大賀さんはいつもにこやかな笑みを浮かべながら、親切に教えてくださった。

新型コロナの感染が始まって3年余りの月日が過ぎた。感染が拡大した直後は、クラシックコンサートだけでなく、ほとんどすべてのイベントが中止された。命を守るか、経済を回すかの議論も多くあったが、音楽などの楽しみがないと、生活の大事な部分が欠落してしまうことも実感した。東京フィルの定期演奏会が再開され、指揮者、演奏者全員がステージ上で立礼をされた時の感動は今も忘れられない。再開の喜びを、私たち観客も分かち合えた。昨年には、コンサートなどのイベントも大方元通りとなり、生の演奏を聴く機会も増えてきた。コンサートでは、演奏が終わった後の湧き上がる拍手とブラボーの声も、また楽しみである。今年こそは、拍手とともに「ブラボー」の連呼を、生で聞きたいものだ。

コンサートの日は、少し早めに会場に入り、プログラムの解説に目を通し、指揮者と演奏者の登場を静かに待つ。

こうして私の至福の時間が始まる。

中鉢良治 (ちゅうばち・りょうじ)

1947年宮城県玉造郡鳴子町 (現 大崎市) 生まれ。1977年東北大学大学院工学研究科博士課程修了、工学博士。同年ソニー株式会社 (現ソニーグループ株式会社) 入社。2005年同社取締役代表執行役社長。2009年同社取締役代表執行役副会長 (~2013年)。2013年国立研究開発法人産業技術総合研究所理事長、2020年同最高顧問。2018年より株式会社ゆうちょ銀行取締役、2022年より日本電信電話株式会社取締役。2011年より2016年まで公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 会長。



1990年、赴任先の米国アラバマ州ドーサン工場での中鉢氏 (前列左)。中央にソニー創業者の一人、盛田昭夫氏 提供:ソニーグループ株式会社